

～簿記（ぼき）再発見～

「ふくふくしき」

ぼきにゆうもん

「複複式」簿記入門

寺尾 友豪

中村 竹志

平成 23 年 3 月 26 日

寺尾友豪先生 お礼の会

於：新潟県燕市吉田 飛燕ゼミ

And Special Thanks To
飛燕ゼミ 宇佐美 利宏 塾長

開業間もない小事業経営者さんの為の 若くてフットワークの軽い税理士

中村竹志 ですよ!

ナカムラ
タケシ

柔道黒帯!でも
大して強くない(笑)

心の荷物を1本背負い!

中村竹志 税理士事務所

(会計と税務のお仕事)

〒950-2036

新潟市西区新通西2-26-16

(日本文理高校から徒歩3分の住宅地)

電話/025-250-0732

FAX/025-250-0738

携帯/090-1696-8653

メール/nakamurat@officeliveusers.com

初回のご相談は無料です。HPにも相談だよ

中村竹志

検索



顧問契約を強制しません。知りたい事だけお教えします。

絶対に諦めない私

- ・昭和48年、西川町生まれ(イチローと同学年)
- ・新大→プログラマー→大原簿記→NSG→大栄経理学院→会計事務所→新大大学院→東京の会計系コンサル会社→新潟の税理士事務所を経て平成20年に独立・開業!
- ・早くて5年と言われる税理士の資格、15年もかけて遂に取得!(何度、諦めかけた事が...)
- ・趣味は登山、いつか富士山にリベンジ!
- ・Yシャツにボールペンのインクをつけてよく妻から怒られています(笑)

夢は叶える
為にある。
たけし



作業場の自宅にてパシャ♪
いつか立派な事務所を!

この名刺は美写紋堂さんの「はたらく名刺」です。



腕には自信があるけれど!
弥生会計の使い方が
融資の相談の仕方が
売上を上げる方法が
わからない...

こんな事でお困りなら
「中村さ〜ん」と気軽に
お電話下さいね♪

*金銭出納帳（家計簿）をつけたことがありますか。

月給をいくらもらって、

毎日の支出と残金を記録するものです。

ふつう、次のような形式となっています。

ア

内容	収入	支出	残金
月給	1,000		1,000
米		100	900
みそ		50	850
しょう油		30	820

関心は、

「どこにどれほど使ったか」「残金は幾らか」

の二点に絞られています。

それゆえ、

使い道は、食費・光熱費・教育費など、
幾つにも分類することがあります。

（ここでは触れずに先に進みます）

使い道以外の分類は考えにくいものです。

家計簿は、

買ってきたものを自分の家で消費し、

他に転売しないのが普通です。

しかし、買った物を自家消費して、原則他に売らない人も

あちこち旅して、珍しい品物を買って求めてきた時、

「売ってくれ」と頼まれることがあります。

未だ商売ではありませんので、元の値段で分けることにします。

旅の買い物ですので、ここではとりあえず、

「おみやげA」といった風に名づけることにします。

これを家計簿に付けると、次のようになるでしょう。

内容	入金	出金	残金
月給	1,000		1,000
米		100	900
みそ		50	850
しょう油		30	820
おみやげA		20	800
おみやげB		40	760
おみやげB(売った)	40		800

1回2回ならば、それでおしまいですが、
繰り返されるうちに、「これは商売になる」
と考えることは良くあることです。商人の発生です。

家計簿は、内容のところに、
収入の内容（例えば月給）が一回限りの場合が多いので、
支出の内容（例えば米、味噌）と一緒に表していても
大した不便はありませんでした。

しかし、お金の入ってくる回数が増えてくると、
入金と出金の内容が同じ欄にあると
出入りを見分けるのが不便です。

そこで、次のように
入金欄と出金欄とを
分けて表すことにしましょう。

入金		出金	
		みやげA	30
みやげA	30		
		みやげB	20
		みやげC	50
みやげC	50		

ただ、帳簿の発生を簡単に読み解くために、
儲けは後で考えることにします。

さらに、これから、少し複雑になりますので、
残金は右端にあるとして省いて示します。

簡単のために、

売り買いは、土産についてだけ示してみます。

入金		出金	
		みやげA	30
みやげA	30		
		みやげB	20
		みやげC	50
みやげC	50		

これが、家計簿の延長から考える

入金&出金の2分類です。

お金の入金と出金については

見やすくなったのですが、

お金の出入りと品物の出入りとを

分けて見たい商人には

まだいささか不便です。

そこで、

お金と品物を分けることにします。

ア 土産 A を得るために、現金 40 円を出します。

カ 土産 A を出して、現金 40 円を得ます。

つまり、

買ったとき

ア お金の出 40 円と

品物の入り 40 円 は同時に起こります。

売ったとき

ア お金の入り 40 円と

品物の出 40 円 と同時に起こります。

このことから、

家計簿の延長で考えていた帳面からの飛躍が起こります。

大きな飛躍です。

左右のバランス表の発生です。

次のようになります。

入金	入荷	出荷	出金
	みやげA 40		現金 40
現金 40		みやげA 40	

現金の出入りを、その理由と共に

同じ欄に表していた家計簿からの大飛躍です。

つまり、

現金の出を右に表し、出金の理由を左に表し、

現金の入りを左に表し、入金の理由を右に表す

ことになったのです。

1つの物事の2つの側面、すなわち、

お金の出入りと品物の入出を

左右に、同時に、書き表すことになったのです。

入金	入荷	出荷	出金

ここで、

帳簿は、

現金の入りを左に表し、

その理由を反対の右に表す。

また、

現金の出を右に表し、

その理由を反対の左に表す、

と考えることになります。

今後、この原則で、簿記を考えてください。

さて、次に、

買って来たお土産を、買って来た元の値段でなく、
少し**儲け**を入れて売ったとき、
その記録はどうなるか考えてみましょう。

40 円で買って来たお土産を、**50** 円で売ったとします。

入った現金は、**50** 円。

出て行った土産の代金は **40** 円。

50 円－**40** 円の **10** 円が儲けです。

今までどおり、

入金のお金 **50** 円を左のお金の欄に、

出て行った土産の品物代金 **40** 円が右に表してみます。

さて、

儲けの **10** 円をどこに示すか、が問題です。

現金	品物
50	40

今まで、左右が同額でしたが、
今回は、左と右の金額が違います。
10 円の儲けがあるからです。
これをどう表すか。

ここで、更に、
バランスシートの大飛躍が起こります。

現金の 50 円を
みやげ物の代金の 40 円と
儲けの金額の 10 円とに、分けてみます。

そして、今まで考えてきたように、
「左側の現金 10 円」の「理由」を右にあらわしてみます。

現金	品物
40円	40円
10円	もうけ 10円

これで、左右のバランスはよくなりました。

左側は、現金や品物の入りを表していました。

右側は、現金や品物の出を現していました。

さて、この「右側の儲け」は、

「現金の出」でしょうか、「品物の出」でしょうか。

いずれでもありませんね。

いずれでもないなら、別の欄を作らねばなりません。

入金	入荷	もうけ	出荷	出金
10円		10円		

4つの分類だったバランスシートが、

5つの分類になりました。

5つの分類もちょっと変ですね。

何故でしょうか。

売り買いで儲けるときもありますが、

損をするときもあるはずですね。

ですから、

儲けの欄のほかに、

損の欄も必要ですね。6つの分類になります。

入金	入荷	損	もうけ	出荷	出金
50円			10円	40円	
40円		20円		60円	

商売が繁盛してきて、

お手伝いをする人が欲しくなりました。

お手伝いする人を雇うと、お金を払わねばなりません。

手間賃の欄が必要です。

お金は出て行きますから、賃金の欄は、

左に表すことになります。

入金	入荷	賃金	損	もうけ	出荷	出金
		50円				50円

ここで、分類は7つになりました。

7つではバランスが悪いですね。

手間賃を払う一方で、

手間賃を貰うこともあります。

つまり、

払う手間賃と貰う手間賃があります。

支払い手間賃と受け取り手間賃の欄を設けることになりました。

これで、分類は8つになりました。

もうちょっと商売が発展してくると、
品物は買ったけれど、現金では払わなかった、とか、
品物は売ったけれど、現金はもらわなかった、
等のことが起こります。

「払わなかった」は、「それでよいのだー」にはなりません。
「貰わなかった」も、「それでよいのだー」ともできません。

品物を買ったけれど、現金では払わなかった時は、
「後で支払います」という義務が生じます。
「品物は売ったけれど、現金はもらわなかった」時は、
「後で払ってもらいます」という権利が生じます。

後で払ってもらおう権利を「債権」と呼びます。
「金の代わり」すから、
「入金」と同じ側に「債権欄」を設けることになります。
後で払わなければならない義務を「債務」と呼びます。
「入金」と逆の側に「債務欄」を設けることになります。
ここで、バランスシートは **10** 分類になりました。

こうして、分類が増えてくると、
 一つの帳面に表すことが困難になってきます。
 ここから、複式簿記が生まれるのですが、
 そこに進むまでに、もう少し
 複々複々式簿記で、
 財産目録や損益計算書を作る練習をしておきましょう。

プラス資産	損失	利益	マイナス資産
A	C	D	B

$$D - C = \text{純益} \quad = \quad A - B = \text{増加資産}$$

これを何例か繰り返せば、
 財務諸表と損益計算書に慣れる。

売買の結果生じる損失は、明らかに損失といえます。

働いた人に支払う賃金は、賃金を払う人から見ると、

出金ですから、損失に近い感覚で見られる。

それゆえ、

損益計算書では、

売買損と人件費とは同じ場所に置かれる。

これは、働く人間にとって、

必ずしも同意できない、少なくとも

気分の良いものではない。

これが、簿記を学ぶ意欲を低くしている理由かも知れない。

簿記を会社の経営者から見るのではなく、

そこに働く人の側から見ると、

人件費こそ、会社の存続理由であるのに、

会社の損金としてみるのは、

ある意味許しがたいことかも知れませんね。

複式簿記の発見の偉大なところは、
現金増減の理由を対面に表すことにしたところでは、

複複式簿記は、
財産目録と利益計算書を
同時に分かるように表現できます。

現金を中心に据えて考えるのが
簿記の表現方法です。

利益の項目は、
現金の現実ではありません。
利益は、現金があることが現実です。
利益の項目は、現金の像です。実態ではありません。
名称に引っ張られて現実だと考えてはいけません。

ここに示したのは、フィクションであり、

簿記の歴史的事実には当てはまるかどうかは知りません。

これを、
入金&入荷はいずれも入りですので、
一つにまとめて

